

2013年度 西山1号窯 発掘調査 現地説明会資料

2013年9月15日(日)
大阪大学考古学研究室



今回の調査の目的

大阪大学考古学研究室では、2003年より継続的に亀岡市篠町に位置する奈良平安時代の窯業生産遺跡・篠窯跡群の調査研究を進めてきました。今回の調査は、科学研究費補助金基盤研究(B)(研究題目:日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究)の一環として、篠窯の大きな転換期となる10世紀後半から11世紀初めの時期に焦点をあて、その時期に操業した窯と考られる西山1号窯を調査しました。須恵器や緑釉陶器の生産が衰退し、瓦生産に主体が移行する時期にあたります。

今年度は窯跡の位置を特定し、その基数などを把握することが目標です。(佐伯)

阪大の既往の調査

大阪大学考古学研究室は、2003年から2006年にかけて亀岡市篠町に位置する大谷3号窯の発掘調査を行い、2012年に報告書を刊行しました。

調査の結果、大谷3-1と3-2号窯の2基の窯跡が検出されました。大谷3-1号窯は、全長約10mを測り、篠窯跡群で最大規模の窯であることが分かりました。

また、窯の操業年代が9世紀第4四半期頃であることと、須恵器とともに緑釉陶器を併焼していたことが判明しました。大谷3号窯の緑釉陶器は、篠窯跡群の中でも最古段階に位置づけられ、窯業生産の変革期にあたる窯跡であることが分かりました。

出土遺物の検討からは、東海系の工人との交流も想定されています。(ジョセフ)

調査の概要

遺跡名: 西山1号窯

(10世紀末～11世紀初頭の窯)

所在地: 京都府亀岡市篠町王子

西長尾1-15

調査主体: 大阪大学考古学研究室

調査方法: 窯跡および付随する遺構の発掘調査(調査区2カ所、調査面積合計26.2㎡)

調査期間: 2013年8月28日～9月20日

(予定)

(橘)



大谷3号窯



大谷3号窯出土遺物

篠窯跡群について

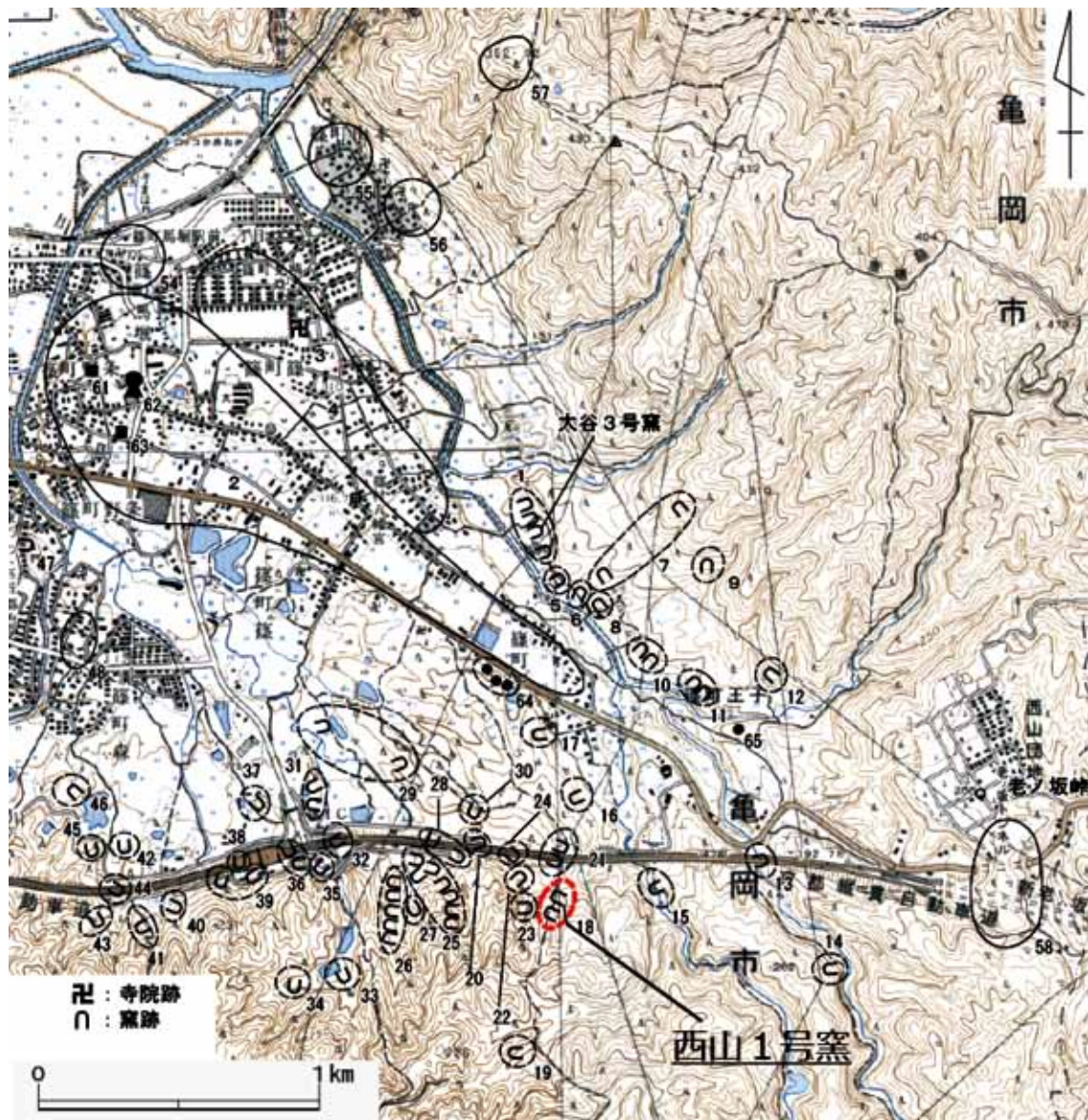
篠窯跡群（正式名称：篠窯業生産遺跡群）は、現在の京都府亀岡市篠町周辺に存在する大規模な窯業生産遺跡です。7世紀の半ばから12世紀に至るまで、様々な須恵器、緑釉陶器、瓦を生産しました。今までに発掘調査や分布調査が実施されており、発掘調査が行われていないものも含めて、百数十基近くの窯があるといわれています。

篠窯の操業開始期は、須恵器という硬質の焼き物を作っていました。西暦794年の平安京遷都後は、平安京への供給に加え、南は宮崎、北は青森まで篠窯で作られた製品が流通し、篠窯は全国でも有数の須恵器の生産地となります。

また、9世紀末になると、篠窯は緑釉陶器と呼ばれる、緑色の釉をかけた高級な焼き物の生産を開始し、多くの製品が平安京および全国各地にもたらされます。

さらに、11世紀の前半には、当時の権力者である藤原道長の建立した法成寺に葺くための瓦をはじめとして、瓦の生産を行っていたことが明らかとなっています。しかし、12世紀中頃には篠窯では窯業生産が衰退します。

平安時代の窯業生産と深く関わりのある篠窯は、平安時代という時代、さらには古代から中世という時代の変革を理解するうえで、重要な遺跡であるといえます。（竹内）

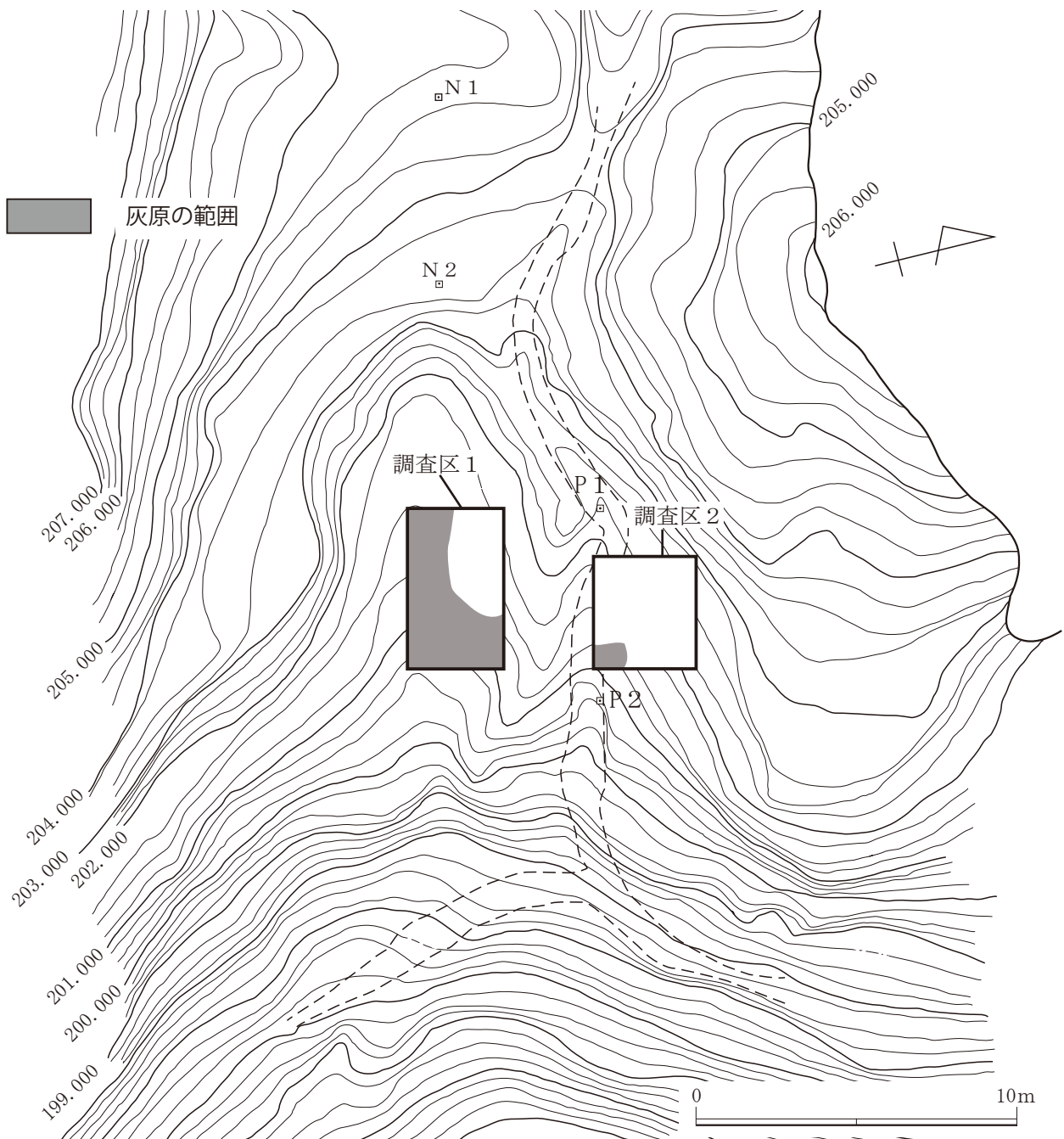


篠窯跡群の遺跡分布

西山1号窯の調査

西山1号窯はこれまで発掘調査がなされていませんが、その存在や一部の遺物は既に踏査（遺跡の存在が予想される地点を実際に歩いて、地表面に露出している遺物や遺構を調査すること）により知られていました。近年、立命館大学や大阪大学考古学研究室などにより、口縁部が膨らんだ独特の形状をもつ鉢をはじめとする須恵器や緑釉陶器、瓦、焼台などが表面採集されました。

大阪大学考古学研究室の調査（2013年2月実施、第1次調査）では測量を実施し、周辺地形の把握とともに、窯の存在が予想される地点の探索に努めました。そして、2013年8月28日より開始した第2次調査では、発掘調査を行っています。この調査では、掘削作業に先立ち、磁気探査によって窯跡と推測される位置を見定めて、2つの調査区を設定いたしました。南側より調査区1、調査区2と呼び分けています。発掘調査の結果、窯跡、灰原（灰や焼成失敗品の捨て場所）、土坑などが検出されました。（上田）



西山1号窯トレンチ配置図

調査の成果

今年度、西山1号窯で得られた発掘調査成果は、大きく3つ挙げることができます。

第1は、篠窯終末期の窯跡を確認できたことです。ちょうど緑釉陶器・須恵器生産から瓦生産への移行期にあたりと考えられます。調査区1・2ともに、窯と推定される焼けしまった壁の一部などを検出しています。出土遺物からみて、10世紀後半～11世紀初め頃に操業したとみられます。

第2は、近江系の緑釉陶器・素地など、他地域の陶工との交流をうかがわせる遺物が出土したことです。今回の発掘調査で得られた緑釉陶器は、濃緑色を呈するものが多くみられました。その胎土も赤褐色を呈し、これまでの篠窯ではほとんど確認されていないものです。形態的にも近江地域(現在の滋賀県)で生産された緑釉陶器に酷似しています。

第3は、10世紀以降の篠窯で初めて三叉トチンが出土したことです。三叉トチンは緑釉陶器を重ねて焼く際に用いられるもので、焼き物同士の融着を防ぐために用いられた道具です。10世紀の篠窯の緑釉陶器は、重ね焼きの痕跡がのこり、粗雑な印象をもたれてきましたが、西山1号窯では良質の緑釉陶器も生産されていたことが明らかとなりました。

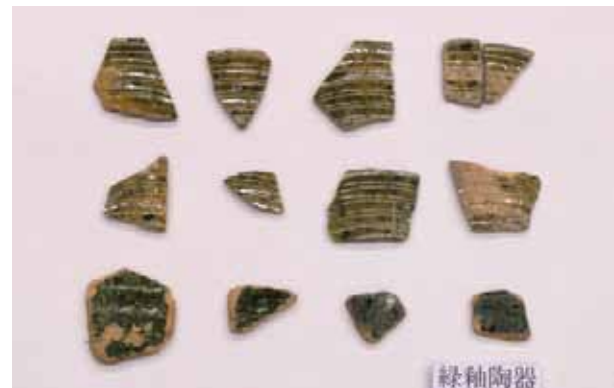
この他にも、篠窯で今までに知られていなかった軒平瓦などが発見されています。

来年度以降の調査も予定しており、今後の成果にもご期待いただければ幸いです。

(三好・桐井)

謝辞

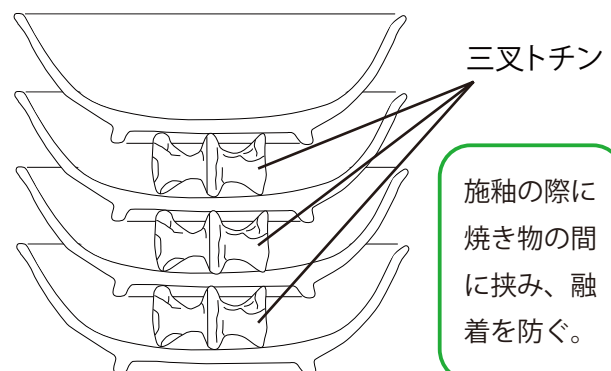
調査にあたっては、亀岡市教育委員会、篠町自治会、地権者のみなさまのお世話になりました。記して感謝の意を表します。



緑釉陶器片



三叉トチン



三叉トチン使用法模式図

施釉の際に
焼き物の間
に挟み、融
着を防ぐ。



軒平瓦片

日々の調査成果は、HPで発信しています。

HP: <http://sueki.extrem.ne.jp/nishiyamal/>